

三枝和子

幽冥と情愛の契りして



と情愛の契りして

三枝和子



講談社

幽冥と情愛の契りして

昭和六十一年五月二十一日 第一刷発行

著者 三枝和子

発行者 野間惟道

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二／郵便番号 一一二
電話東京(〇三)九四五一―一(大代表)

印刷所 株式会社精興社

製本所 藤沢製本株式会社

定価 一四〇〇円



落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替いたします。

© Kazuko Saegusa 1986 Printed in Japan

三枝和子 さいえわかしこ 昭和四年兵庫県に生まれる。

関西学院大学文学部哲学科卒。

『鬼どもの夜は深い』(新潮社刊)で、昭和五十八年第十一回泉鏡花賞受賞。

最近の著書に、『崩壊告知』(新潮社)、
『曼珠沙華燃ゆ』(中央公論社)、『光る沼にいた女』(福武書店)等。

カオスから 幽冥^{エレボス}と暗い^{ニクス}夜が生じた
つぎに夜から 澄明^{アイン}と昼日^{ヘメル}が生じた
夜が幽冥と情愛の契りして身重となり 生みたもうたのである。

(ヘシオドス『神統記』廣川洋一訳より)

装画 装幀
笹岡信彦
小松桂士朗

目次

第一章 遠く、デルポイの雪

7

第二章 ミューケナイ、風が吹く

72

第三章 クレタ、迷宮の夜の声

131

第四章 ふたたび、アテネの珈琲を

188

装画 笹岡信彦
装幀 小松桂士朗

幽冥と情愛の契りして

第一章 遠く、デルポイの雪

アラホバは、風の町という意味だと聞いた。冬に行ったことはないが、ひどく寒いに違いない。振り返ると、過ぎて来たその小さな町が、累々と重なる山並の端に、風に吹きさらされながら必死でへばりついている姿が見えた。

陽はまだ沈み切っていないが、すでに暮色の濃い眺めであった。プレーストスの谷の深い亀裂が、肉眼ではしかと捉えられないくらい煙っていた。眺望台を兼ねて出張った道路の柵から身を持ち出して「あれがアポローンの神殿、こちらはアテーナーの聖域」と勉強したばかりの発音らしく、互いに教えあっている学生たちのグループがいる。「パトラを出るとき、デルポイは雪だと聞いて来たのに」などと話しあっている。おそらく、ペロポネソス半島を一周、北上し

て来たツアーだろう。

ここ数日、氣候の異変で雨が時折みぞれ霰まじりになったりはしたが、雪は降っていない。それに今朝はその雨も止み、雨が止んだとたんに気温が上昇し、昼間は、春というより夏を思わす強い光になった。久し振りの陽差しを浴び、パルナッソス山は赤く輝いた。海が頭の上に来たのではないかと思えるほど、空も青く深く見えた。ファイドリアスの断崖の裂け目の上には真白な雲が二つ、一日中、そこにそうしていたのではなかったろうか。アラホバの町はずれでは、大きなリュックを背負い、大きな靴を履いた鋭い目付の老人に出会った。先が拳の形になっている長い杖を持っていた。パルナッソスの山の人たちが時折、この風の町に下りて来ると言う。雑貨屋の店先へ入って行く老人を、あるいはそうかも知れないと眺めていた。

デルフィからアラホバへは、途中、ぶらぶら道草したので三時間以上もかかった。一昨日も同じコースを歩いたのだが、雨にもかかわらず、もっと早かったように思う。帰りは、やはりアテネからの定期便のバスにした。四時すぎにデルフィに帰り、此処ここへ来てはじめて、遙かな山並の一隅にあるアラホバを眺めた。これまでは視界の利かない日が続いて、遠望できなかったのである。今日はキルフィスの山もオリブの密生する谷も鮮かに見えた。

デルフィは古代の人びとが「世界の中心」と考えた場所である。山の壮大さ谷の豊かさばかりでなく、海も望まれるせいかも知れない。デルフィからアラホバへの、散歩というには少し長くハードな山道行を二度も試みたのは、デルフィの神域ばかりでなく、その周辺の雰囲気のかなに

生きてみたかったからだ。

昔、デルフィは「デルポイ」と呼ばれていた。ホテルや土産物店の立ち並ぶ界限はともかく、聖域は、むろん今も「デルポイ」である。気が向けば、いつでもそのなかへ入って行って、二千年前、三千年前、いや、もっと以前の世界にさ迷うことが可能だ。指呼の間に、いつでも入って行ける、現在と遮断された過去の領域が厳然と存在する。それは不思議な体験だった。異国の地に居ながら、異国とか母国とかいった区別が一瞬吹っ飛ぶ。現在と過去という関係にだけ意識が向う。そういう一種「奇妙な装置」と言える。

予想した通り、その日本人学生グループのツアーはN氏のガイドで来ていた。章子も昨年は「ギリシア神話研究会」のメンバーに加えてもらって、やはりN氏のガイドで二週間ばかりの旅をした。

全くの偶然だったが出会いが嬉しくて章子は声が弾んだ。「お忘れかも知れませんが」と昨年の礼を言って名乗った。リーダーがその方面で著名なひとだったので、N氏は記憶に残して丁寧に應對してくれた。ホテルを質ねると近所だが別のところだった。昨年の御礼に酒でも買って届けよう、などと思案していて、その夜、八時過ぎ、タベルナ（居酒屋レストラン）へ行った。ぱったり顔を合わせた。

タベルナの名前はブサータ。他ならぬN氏自身から教えてもらった店だった。小ぢんまりとし

ていて、一品料理を硝子ケースにずらりと並べているので注文し易い。ホテルの食事は飽きるので滞在中の夕食は此処と決めて、章子は毎日変化を愉しんでいたのである。

N氏はチャーターのバスの運転手らしい男と二人連れだった。章子たちのツアーのときには、よく希望者を募って、その土地々々のタベルナへ案内してくれたのだが、今回は学生たちのグループだから、そんな遣りかたはしていないのかも知れない。

「よく会いますね。縁があるんだな」

夕方出会ったときよりN氏は少し打ち解けた表情だった。

「デミートリアス君」と運転手を紹介した。

N氏には、昨年のツアーのあいだもずっとその印象が拭えなかったのだが、狷介なところがある。立居振舞のどこかに、それをどこだと指摘できないのだが、人を寄せつけない雰囲気がある。厳しいというのではなくて、触れるとすぐに反応する不機嫌のツボみたいなものがあり、それが章子には苦手だった。

一人でデルフィに一週間ほど滞在していると言ったら、その不機嫌のツボにはまってしまったらしいので、慌てて口を噤んだ。章子は本当はアラホバの町に泊りたかったのだが、適当なホテルが無かった。ギリシア語ができない章子にとって片言の英語で用の足りるデルフィのアメリカン・スタイルのホテルが有難かったのだ。しかし、もちろん、そんなことは言わない。N氏は大のアメリカ嫌いだし、ギリシアに來たら何故ギリシア語を勉強しないのかと難詰されそうなので、

危うきに近寄らず、と「アラホバへ、二度ばかり行って来ました」とだけ報告すると、変な顔を
した。

「あすこは、何も観るものはないでしょう」

観光じゃないのです、カフェニオンに坐って来るだけです、としかし結局、それも言いそびれた。昨年もそうだったが、N氏の前に立つと、何故か章子は色んなことを言いそびれる。

章子がカフェニオンにいる時間は三、四十分だ。昼間から退屈そうに珈琲を飲んでるのは男
たちばかりで、その男たちが物珍しそうにこちらこちらを眺めるので何となく落着かないのだ
った。それでもアラホバに行ったからには、粗末な木の椅子を道路に並べただけの、集まってい
る男たちだって、取り立てて話すことはないというふうな、しかし仕方なく時間を遣り過すより
他ないというふうなその雰囲気、幾らかでも身をおいて来るのが目的と言えば目的なのである。
彼らは、褐色で精悍な顔立ちをしているのに目に光がない。アテネの街角で見かける男たちの
ようには喋らない。殊更笑ことさらいもせず、殊更議論もせず、何となく物を落したように呆然として、
大きないかつい手に、指を開けばそのまますっぽり納まってしまいそうな小さなトルコスタイル
の珈琲のカップを持って、ちびちびと舐めながら時間を空費している。

——あれは何なのだろう、あの男たちの無気力さは……。

アラホバからデルフィに帰って来ると、何故か安心感があった。安心感というのも変なのだが、
アラホバは異国だが、デルフィは章子にとっては普遍的な村なのだ。歴史の流れによって徹底的

に捨てられた過疎の村。デルフィに居ると、章子は自分がギリシア人であろうとなかろうと、ヨーロッパ人であろうとなかろうと、そうした一切が関係ないものに来て来るのだ。アラホバのカフェニオンで為すことなくぼんやりと珈琲を飲んでゐる男たちと「デルポイ」とのあいだには、量り知れない隔たりがある。その隔たりと、いま此処、デルフィに来て時折、思い出したように神域を彷徨する異国人としての章子自身と「デルポイ」の隔たりとは、ほとんど同じでないかと思えて来る。いや、異国人である章子の方が、ひょっとしたらこの「デルポイ」には近いのではないかとさえ思えて来る。それが章子にとって不思議な体験だった。

「しかし可笑^{おか}しなひとですねえ。何してるんですか、こんな所で一週間も」

N氏は何度も首を振った。何してるんですかと問われても答えようがない。まさか奇妙な装置で遊んでますとは言えないので、ただ黙って笑っている。

「いいなあ、ぼくも一週間くらい、デルポイでぼうっとしていいなあ」

「でも、此処へは始終いらっしゃるんでしょう」

「仕事ですからね。仕事で来るのはつまらない」

N氏が「デルポイ」で、ぼうっとしてたいのは、奇妙な装置と幾らかでも関わりがあるのだろうか。章子はちょっと気持が動くが、それを質問するには、人類の歴史と民族の歴史の区別の領域を飛び超えるややこしい理屈を自分なりに整理して発言しなければならぬので止めた。昨年の印象からでもN氏はかなりの理論家である。日本に戻れば大学の教授ですよ、などと言う

人もいた。章子程度の知識では太刀打ちできないので、敬遠して黙っていると、「女のひとの長期滞在というのは、大てい、エーゲ海。ロドス島かクレタ島のリゾート・ホテルなんですかねえ」と首を振った。「デルポイ」で、しかも一人で、とそれは口には出さなかったが、明らかに不審の念を抱いたようであった。

章子はひたすら飲むことにした。

「レツィーナ（地酒・ワイン）、もう少し取りましようか」

「へえ、相当腕をあげましたね。これは、くせがあるので最初のうちは沢山は飲めないのですがねえ」

「オリーブの実をおつまみにするのです」

「どっちもおいが強いじゃありませんか」

「だから相殺するのです」

すると、ふん、というふうに、それが癖らしい皮肉っぽい笑いかたをした。

「女が言う科白^{せりふ}じゃあないなあ」と幾らか親し気な口調になって、運転手に何か言った。何と言ったか分らないが、デミートリアス君は、大きな声で笑った。人の好きそうな目をしばたいて、恐れ入ったふうに首を竦めてみせた。それで章子も見当がつくので、

「どうぞ^{バツカロ}」とすすめると一層大きく首を振る。ビールの小瓶一本で充分だと仕ぐさで示す。

「遠慮じゃありません。前に一度失敗したことがあるので、仕事中は前夜飲み過ぎないことにし

ています」

N氏が代りに言う。デミートリアス君は、にこにこ頷いている。すると今度はN氏はデミートリアス君に向って何か言う。デミートリアス君も何か答える。首を振ってN氏が何か言う。デミートリアス君は、ちょっと真剣な顔になって手帳を出して書きとめる。N氏が笑いながらデミートリアス君の肩を叩くと、デミートリアス君は誰かの声色を使ったのか、そこだけ細い女のような声になって揃って笑う。

章子を取り残された感じで、しかしどちらにも等分の笑顔を送りながら二人の遣りとりを眺めている。

「で、いつまで御滞在ですか」

「……………」

章子はN氏がいきなりこちらに向って話しかけたのでどぎまぎする。デミートリアス君との話と繋がっているのかどうか分らない。顔を見ると、そり返った茶色の睫毛をばちばちさせて笑っている。

「いつまでとは決めてませんが」

「ふうん。退屈しません？」

「そういうときにはアラホバへ出かけます」

「いよいよ精神構造が分らないなあ」